男女合同全裸で行われた異様な身体測定

とある高校の2年A組にとって、春の身体測定はただの健康診断なんかじゃなかった。

男女合同、全裸で強制される狂った伝統は、「心身の鍛錬」と学校が言い張る建前でしかない。

実際は、羞恥と興奮がぐちゃぐちゃに絡み合ったものだ。

朝のチャイムが鳴り響いた瞬間、教室の空気が一変した。

担任の佐々木先生が教壇にドカッと立った。

「今日は身体測定だ。例年通り、男女合同、全裸でやる。文句は聞かねぇ。さっさと準備しろ」と、低くドスの効いた声で言い放つ。

教室が一瞬凍りついた。息が詰まるような静寂の後、男子のざわめきが爆発し、女子の顔が恐怖と嫌悪で歪んだ。

空気がむわっと熱を帯び、鼻腔を刺すような緊張感が広がった。男子の目がギラつき、女子の唇が震え出す。地獄の幕が上がった。

「全員、制服脱げ！脱いだら廊下に出て、男子は右、女子は左に並べ！」

佐々木先生の号令が響き、教室が一気にカオスに突入した。

仕切りも何もないただの教室で、クラスの男女全員が同時に脱ぎ始める異常事態。

男子の荒々しい息遣いと女子の小さな悲鳴が交錯し、空気がドロドロに濁った。

衣擦れの音、パチンと外れるボタンの音、床に落ちる制服の重い音が響き合い、まるで猥雑な儀式の前触れみたいだった。

山田健太が「っしゃ、やるしかねぇだろ！」と叫んでブレザーをバサッと脱ぎ捨てた。

がっしりした体に毛深い胸がドンと目立ち、シャツを脱ぐと日に焼けたゴツい腹筋が剥き出しに。

ズボンを豪快に下ろすと、太い太ももが現れ、女子の視線が一気に集中した。

ボクサーパンツに手をかけた瞬間、「よし、ちんこ出すか」とニヤつきながら一気に下ろす。

毛深い下腹部からおちんちんがボロンと飛び出し、平常時で少し縮こまってたけど、先端が赤く膨らんで脈打ってた。

田中彩花が「キャー！何！？何！？やめてよ！」と甲高い絶叫を上げ、両手で目を覆ったけど、指の隙間からチラッと見て、「うわっ、汚い！やだやだ！」と体をガタガタ震わせた。声が裏返って、喉が詰まったみたいにヒューッと鳴った。

多村華子が「うわっ！最低！隠せ！隠せよ！」と顔を真っ赤にして叫び、眉をキリッと吊り上げて唇を噛み潰した。目が恐怖でギュッと細まった。

健太は「女子に見られてるの興奮するな！」と声が上ずり、女子の脱ぎ始めをガン見。喉がゴクッと鳴り、目が血走ってギラついた。

佐藤悠斗は「ちょっと恥ずかしいな」と小声で呟きながら、シャツのボタンを一つずつ震える手で外した。

細身で色白の体に胸毛はゼロ。ズボンを下ろすと、華奢な脚がプルプル震えてた。

トランクスに手をかけて、女子の衣擦れの音に耳が過敏に反応し、「見ちゃダメだ…でも見たい」と頭がぐちゃぐちゃ。

ゆっくり下ろすと、小さなおちんちんがぽろっと出て、先端がピンク色で緊張で縮こまってた。

林優奈が「やだっ！キモい！やめてよ！」と叫び、目をぎゅっと閉じて

首を振ったけど、好奇心に負けて一瞬チラ見して、「うわっ、やだ！気持ち悪い！」と顔を真っ赤にして絶叫。体がビクッと跳ねた。

岡本梨花が「うわっ！見せないで！汚いんだから！」と悲鳴を上げ、手で顔を覆って後ずさり、足がもつれてよろけた。

悠斗は「やばい、見たい…見ちゃう」と心臓がバクバクして、女子の動きに目が釘付け。足が震えて膝がガクンと落ちそうになった。

内藤翔太は顔を真っ赤にして「俺、嫌だ…無理だって」とぼそっと呟き、ブレザーを震える手で脱いだ。

やせ型の体に肋骨がうっすら浮いて、シャツを脱ぐと白い肌が寒さに震えた。

ズボンを下ろすと細い脚がガクガクして、ブリーフに手をかけた瞬間、「見られたら終わりだ…」と喉が締まって息が詰まった。

一気に脱ぐと、小さなおちんちんがぶらんと出て、緊張で縮こまって先端が微かに震えてた。

松井さくらが「うわっ！何！？何！？汚い！」と叫び、目をカッと見開いて一瞬固まった後、「やだ、やめてよ！」と両手で胸をギュッと押さえた。声が震えて涙が滲んだ。

岸田沙良が「キャー！やめて！やめてよ！汚い！」と涙目で絶叫、大きな目が恐怖で潤んで、ショートカットの髪が乱れて首筋に張り付いた。唇がプルプル震えて、声が途切れ途切れにヒクッと鳴った。

翔太は「見ないでくれ…頼むから」と呟きながら、女子の動きに目を奪われ、心臓が締め付けられて息が止まった。

藤田大輔は無言で淡々と脱いだ。
サッカー部の筋肉質な体が剥き出しになり、シャツを脱ぐと鍛えた胸筋がドンと出て、ズボンを下ろすと太い太ももが目に焼き付いた。

ボクサーに手をかけて、「見られるのも悪くねぇ」と内心ニヤリ。一気に下ろすと、太めのおちんちんが堂々と垂れ下がり、先端が赤く膨らんでビクンと跳ねた。

彩花が「うわっ！何！？最低！やめて！」と悲鳴を上げ、目をぎゅっと閉じて首を振ったけど、恐怖で一瞬見て、「やだ、見ないでよ！」と絶叫。体が縮こまって膝がガクガクした。

華子が「気持ち悪い！隠せって！今すぐ！」と眉を吊り上げて拳を握り、顔が真っ赤に燃えた。

大輔は「女子、見るなよ」と笑いながら、視線は女子をガン見。喉がゴクリと鳴り、目がギラギラ光った。

中村亮太は「慣れてるから平気」と軽口叩きながらシャツを脱ぎ、均整の取れた体をさらけ出した。

ズボンを下ろすと長い脚がスラリと目立ち、トランクスに手をかけて、「見せつけてやるか」と心が昂った。

脱ぐと、長めのおちんちんが揺れて、先端が膨張して脈打ってた。

優奈が「キャー！キモい！やめてよ！」と叫び、手で口を押さえて後ずさったけど、一瞬見て、「う

わっ、やだ！汚い！」と顔を背けた。声が震えて喉が詰まった。

梨花が「うわっ！見せないで！気持ち悪い！」と悲鳴を上げ、目をぎゅっと閉じて体を縮こめ、唇が震えた。

亮太は「まぁ、悪くねぇだろ」と呟き、女子の脱衣を堂々と眺めて、心臓がドクドクした。

高橋直樹は「仕方ねぇな」とため息ついて、太めの体を露わにした。

シャツを脱ぐと柔らかい肉が揺れ、ズボンを下ろすと太い脚がドスンと現れた。

ブリーフに手をかけて、「見られるの恥ずいけど…」と喉が締まった。

一気に脱ぐと、毛深い下腹部から短めのおちんちんがポロリと出て、先端が赤く膨らんでビクッと震えた。

さくらが「やだっ！汚い！やめてよ！」と叫び、目を大きく見開いて一瞬固まり、「うわっ、見ないで！」と両手で顔を覆った。声がヒクッと途切れた。

沙良が「うわっ！気持ち悪い！やめて！」と絶叫、大きな目が恐怖で潤んで、唇が震えて涙がポロポロこぼれた。ショートカットの髪が乱れて首に張り付いてた。

直樹は「じゃあ女子のストリップでも見るか」と女子をチラ見して、胸が締め付けられて息が荒くなった。

多村華子は「こんなのありえない…ありえないって」と呟きながら、ブレザーを震える手で脱いだ。